

学園めぐり □ 東北福祉大学

二十一世紀が求める世界観

—Toward the 21st Century New Ways of Thinking—

東北福祉大学学長

萩野 浩基

一

「自己をはこびて方法を修證するを迷とす、
方法すすみて自己を修證するはさとりなり」(道
元)

哲学・倫理・宗教なき科学技術は羅針盤のな
い船であり、科学技術なき哲学・倫理・宗教は
帆を失った船である。

今や、人間社会は「羅針盤」を失った船のよ
うである。人は進む道に迷うとき、自己を疑い、

己を振り返り、責任を帯びることこそ再起の原
点である。

二十一世紀のキーワードはいくつか挙げられ
ると思われるが、最も大切なものは環境と福祉
と宗教である。自然環境も福祉も宗教も人間に
とって欠かせないものである。

十九世紀、二十世紀の価値のベースには「量」
というものがあつた。量と能率を求めるがため
に、競争のための競争価値しかわからない病的
側面を内にもつた社会にしてしまった。

その典型が大量生産と大量消費である。さらにお金を公分母にし、すべての価値を計り、知らぬ間に今日の現実社会を作ってしまった。大量生産、大量消費とは、言い換えれば「物」を無駄にしましよという運動である。

「物」を無駄にしましよということは「物」を作る人間の労働を無駄にしましよということになる。労働を無駄にしましよということは、人間を無駄にし、自然も無駄にしましよということに繋がる。

二十一世紀はもつと大自然の中の人間存在ということを中心にした世界観を必要としている。

人間を中心におくとといっても、十七世紀の近代哲学の父デカルトやフランシス・ベーコン以来の個人主義的なものに偏った世界観では人類は自滅の道を歩むことになりかねない。

地球という惑星の中で生きる人間、太古より

四大・火水気地から成るとみてきた大自然の中で他の生き物と共に生きる人間としての捉え方がなければ、やがて人間の生存そのものを否定することになる。多岐多様の社会で「量」(quantity)から「質」(quality)への変化こそ必要条件である。いくら知識を量的にたしても、知識は知識であり智慧ちえに変化しないのである。

個人主義的哲学では「個人」として知的に「人」ひとを高めることに比重がおかれたように思える。しかし「人」と「自然の中の人間」との間には大きな差があること知らねばならない。

「人」をいくら分析しても「人間」にはならない。

また「人間」という概念 (conception) が捉えられても、これまで疑うこともなく絶対視されてきたヒューマニズム (人道主義) の捉え方では二十一世紀には限界があるように思えてならない。すなわち「人間中心主義」では二十一

世紀は人類が生存できないとさえ思える。

人間は地球的自然環境のシステム（体系）

の中において初めて生存が許されることを忘れてはならないであろう。いずれにしても二十一世紀は今日の物質的文明社会の生みの親であるアングロサクソン流の二元論のみでは限界があると思えてならない。

もつと視野を広げ、多元的な東洋の多種多様の文化や宗教、特に仏教にみる寛容さと、自然との一体感からくる東洋的宇宙観に謙虚に目を向ける必要がある。

今までの個人主義的ヒューマニズムを絶対視するのではなく、東洋の文化や宗教をも視野に入れた新たな二十一世紀の価値観・世界観が創造されなくてはならない時にいたったといえる。自己中心的な世界観からのみでなく、もつと大自然・大宇宙の摂理に自己を写して観ることが今、肝要ではなからうか。

冒頭に示した『正法眼蔵』現成公案の「自己をはこびて万法を修證するを迷とす。万法をすすみて自己を修證するはさとりなり」は深く切にさとすところがある。

つまり大自然、大宇宙の摂理から逆に自己を照らし出し、自己をふりかえり責任ある実践こそ明日への道と思える。

二

東北では「山背^{やませ}」という、時には雪混じりの風が夏近くまで吹くこともある。人間が東北に住み着いて以来「冷害」という死とも直面する自然の中で、次の年の収穫を夢見てけなげに生きてきた。

「一年二年の計は米の出来高にあり、三十年三十年の計は山に樹木を植える。五十年百年の計は国に人を植えるにある。」

古く中国・春秋時代に既に「終身の計は人を樹^う

うに如かず」という名言がある。人を育てる教育はいつの時代でも事の始まりの原点であった。

明日の社会を思うとき、時の経済生活をおろそかにしてはならないが、明日への教育の大切さは決して忘れてはならない最重要課題である。

東北福祉大学は明治八年曹洞宗仙台専門支校として誕生し今日に至っている。そこに脈々と受け継がれている建学の精神は仏教・禅の心である。この建学の精神こそ広義の福祉であると信念の基に発展を続けている。

日本で学問としての狭義の「社会福祉学」は外国の影響により特殊な発展をした。その一つの流れはアメリカ流の社会適応を援助するソーシャルワークを中心に方法論が展開されている。もう一つの流れはイギリス流の慈善事業から始まった社会事業と社会保障を中心に展開されている。

この二つの流れは遅れていた日本の社会福祉

の発展のためには確かに貢献があつたといえる。しかし、何の実現のためのソーシャル・ワークか、何を今、本当に保障しなければならぬかを考えるとき、これまでの福祉の概念に限界がみえてきた。

社会福祉はもつとグローバルな視点から捉えられるべきだと考え、当東北福祉大学は常に新たなチャレンジを試みてきた。二十一世紀の福祉が担う課題は多岐にわたり、その重要性は益々深まるであろう。「新しい価値の創造」を目指しての新しい福祉が構築されなければならぬといふときにある。

東北福祉大学のカリキュラムは政治、経済、法律、社会学、教育学、心理学、人間学、等々の「人文・社会科学」に加え医学、栄養学、芸術、体育を積極的に取り入れ、総合的に社会福祉を押し進めてきた。現在本大学は四学科構成であるが、この四学科構成は日本の福祉系の大

学や各種専門学校の一つのモデルとなつてそれなりの貢献をしてきた。

しかし二十一世紀を節目として新たな発想を持つて総合福祉学部の再構築を考えている。社会福祉・産業福祉・教育福祉・福祉心理・環境福祉など二十一世紀に答へうる福祉のコンセプト(概念)を確立すべく総合福祉を目指して着々と新しい歩みを始めた。

さらに、本大学では建学の精神を社会化するための切り口の一つとして、福祉と感性との関係において捉える試みを行っている。

インドの仏教やヒンズー教は著しく分析的でありまた哲学的である。中国の儒教や道教は実利的であり、また道徳・倫理的であると思える。

インドや中国の強い影響を受けた日本の宗教特に仏教は、日本特有の風土により、特に「感性」的に鎌倉仏教の内に開花したように思えてならない。

「春は花、夏ほととぎす秋は月、冬雪さえて
すずしかりけり」(道元)の歌にあるように実に
自然と感性的に日本に伝統としての心が伝わっ
てくる。

この感性的心の社会化を目指し東北福祉大学
は日々努力している。

三

福祉の目指すところは生きる喜びに満ちた人間生活の実現にある。福祉の実現のための努力は健常者も障碍者も、人間がよりよく生きるために、環境、身体、精神、そして社会体系を二十一世紀に向けて再構築しようとするものである。この目的達成のために人間の「感性」に視点を当て、絶対でない人間であるが故に自然科学をベースに人文社会科学、そして芸術・宗教の分野まで視野に入れた学際的福祉研究をおすすめる必要がある。

現代社会で起こる諸々の諸課題の問題点の根源を探るとき、人間の持つ本来備わった「感性」の衰弱に起因する点が大であることを知る。ともすると失いかけている「感性」を甦らせる事が人間として人間らしい生活を取り戻すためにも急務で不可欠の要件であろう。今こそ「感性のとき」である。

二十一世紀にむけて文部省もはじめて私立の社会科学系の大学でフロンティア的研究を進めている大学に思い切った研究予算をつけた。「学術フロンティア構想」予算がそれである。

東北福祉大学の感性福祉研究所の「生命科学を基礎とする感性と環境の相互作用に関する学術的研究」が第一号として幸いにも文部省より選ばれた。本大学の使命は重いとスタッフ一同張り切っている。

感性福祉研究所は四つの研究部門に分かれ、各分野の基礎研究と「癒し」の応用研究を行う。

更にそれに「共同利用センター」を設け日本国内、外国の研究者の共同研究、「癒し」の実践家の養成と研究を始め、「心の栄養(心を教えるのではなく、豊かな優しい心への条件整備を旨し、人に心の栄養を与え共に育つ姿勢)」の教育担当者の研修のためにも利用できるようにしている。こうした研究成果を一日も早く、また多く社会に還元することが使命であるとして努力している。

ここまで東北福祉大学がくるには幾つかの試練があったことは事実である。感性を育てる教育のために幾つかの努力をしてきた。教壇で教授が教えて「感性」が身に付くものではなく、学生自らが、つかみ、感性を伸ばしていくものである。そのための手助けとして施設の充実も図ってきた。

例えば「芹沢銈介美術工芸館」があげられる。大学独自の美術館としては全国にも例がないと

いう評価を得ている。人間国宝であり、染色界の巨匠故芹沢銈介氏の遺作千点余と、氏が世界、特にアフリカから集めた民族学的にも価値の高い美術工芸品が二千四百余点を収めている。

さらに約三カ月のローテーションでテーマを決め学生のみだけでなく一般にも公開し、喧噪とした社会での一服の清涼剤として市民にも学生にも喜ばれている。最近特に海外から訪れる人も多くなり、アメリカのリバーサイド市立博物館で芹沢銈介展を開催し市民に喜ばれ親しい交流を深めている。

また注目されている本格的音楽鑑賞専用の「けやきホール」を持っている。宮城の具木の「けやき」と青葉通り、定禅師通り、広瀬通りの緑をイメージして造られたものである。仙台、国内、そして世界各国から有名なアーティストが集まっている。

人間の創造した実物の美術工芸作品や生の音

楽に直に接することにより学生の心の中に豊かな感性が日々培われていることはやがて必ず花ひらくと信じている。

また、学生に福祉の心を体で直接体得してもらう目的でやつとのことで実験的施設を造ることが出来た。梅檀林せんだんりんにちなんで「せんだんの杜もり」と名付け園長とせず「杜長もりちやう」とした。地域社会も含む概念として命名したが、地域にも親しまれその効果もあり、全国から見学者が絶えず、対応に困っているのも事実である。「せんだんの杜もり」をモデルとした施設が東北のみでなく全国に広がっていることに喜びを感じている。

オールド・エイジッド・マンとはエクスペリエンスド・マンのことである。つまり経験と智慧ちを蓄積えした大切な人が高齢者であり、老人である。中国では老人とは老人星という龍骨座のもっとも大切な首星であり尊ばれてきた。また、道元は正法眼蔵の溪声山色の中で「大慈悲の深

く、広度衆生の老大なるには……とあり、老大とはまさに經驗と智慧と慈悲を備えたことになる。

高齢者・老人のお世話をするのではなく、人生の大先輩から学ばせて頂くという姿勢を「せんだんの杜」の精神としている。その精神は地味ではあるが着々と根付き、他では学べないものをこの杜で学生達は日々修證している。

四

「小さな小さな事が人の心を喜ばす。小さな小さな事が人の心を悲しませるから」。

目や耳や手足の不自由な方々、生活年齢は成人になっても心身の発達の遅れている方々と接した時を思い起こしてみよう。障碍を負いながら一杯生きようとされている方々にどこまで近づき、正しく理解し、共感し喜びを分かち合うことが出来るであろうか。

残念ながら距離感が存在しているのが健常者

の実感かもしれない。健常者の側からの論理は所詮健常者の論理であり、障碍者に代われない限り差別的見方が存在していないか。まず己を疑うことから福祉の一步が始まる。

しかし共に生き、共感しあう喜びを分かち得れるのも人間であることを忘れたくない。東洋的思惟方法と西洋的思惟方法には風土から生じるのであると思われるが大きな違いがみられる。

仏陀の言葉として有名なスッタニパータには「大きくとも、小さくとも、見えるものも、見えないものも全て生きとし生けるものそれなりに他にかえられない尊厳がある。」という意味の言葉が強く述べられている。また枕草子には次のような言葉がある。「何も何もちいさきものは、いとうつくし。」

たとえ弱く、小さな命でも、生きるものへ心ひかれるのが人間であろう。この「うつくし」

「美し」はもとより「愛しい」、つまり、「いと

しい」慈愛の心にあふれている。生活での身近なもの、小さき命への「慈しみ」は対象と融け合う心であり、慈悲の心、福祉の心の原点でもある。

福祉の実践記録の中には涙なくしては語れないものが多い。また、クライアントの方々に對して己の力の及ばぬ限界を知る人も多い。そのときクライアントの方に、何も為す術もなく、ただ痛むところに、そつと手を当てる、古くから日本にある「手当」の心こそ大切な人間の行為であろう。

東洋的思惟の表れとして古くウパニシャッド (Upanisad) 哲学がある。この「ウパニシャッド」とは「側に座り、限りなく近づく」という意味を持っている。ここに人間の限りなき他との融合に向かつての姿勢をみる。この語彙の中には対象のうちに自己と他と共感する生命観を感じ取る。

知的障碍を持った私の知る山田ミキちゃん

(現在生活年齢三十歳) のことである。ベランダにミキちゃんの妹が観察用に育てたトマトが夏になり、やつと赤く色づいてきた。これを見たミキちゃんはなんと叫んだであろうか。

「トマトが咲いた。トマトが咲いた。」と喜び叫び続けたのである。

またミキちゃんは、湖にボートが浮かんでおり、ボートを人が一生懸命漕いでいるのを見て喜びの声を上げた。「ほら、あそこに、ボートが泳いでいる、ほらボートが泳いでいる。」

何百冊の哲学書を読むよりも、どんな学識のある人の話を聞くよりも、「トマトが咲いた。」「ボートが泳いでいる。」が感性的に心の底に深く響いてくる。

知識と合理性、能率と物欲とで頭の中がいつぱいになっている現代人に「カツ」を入れ、忘れていたものを思い出させるのに十分な言葉である。